

28年度 氷見市教育総合センターだより 第3報

第2回学力向上研修会（授業研究会・講演会） ～比美乃江小学校で開催～

授業研究会	授業提案	3年1組（38名）	算数「わり算のしかたを考えよう」
	指導者	比美乃江小学校	教諭 越前 雄介 先生
講演会	講師	上越教育大学教職大学院	教授 瀬戸 健 先生
	演題	「関わりのある授業づくりと学力保障」	

6月28日（火）比美乃江小学校のご協力を得て、第2回学力向上研修会が開催されました。総勢49名の参加者の下、①「分かる・できる」を自覚する学習過程、②学びを実感できる関わり合いの場、③学びに向かう学習習慣づくりの3視点を研究の中心に据え、越前教諭の意欲的な授業が行われ、ブレン・ライティング的手法を取り入れた協議会では、参加者相互の活発な意見交換がなされました。



また、講師の瀬戸教授からは、提案授業を基にしたきめ細かな指導や「伝え合いの4段階」、「教師の言葉には力がある」などの視点から、実践的で示唆に富む講話をいただきました。

以下、参加者の感想の一部を紹介します。

- ・既習事項を明らかにして学習を進める方法は、「分かる、できる」を子供たち自身が認知し、自信をもって新しい学習に取り組むのに効果的だった。
- ・教師主導でなく、子供たちから出た言葉を使って学習のまとめをすることによって、より主体的に学習に取り組む子供たちの姿が見られ、参考になった。
- ・「あまりって何？」と言っていた児童が、おはじきを使うことで「あ、そういうことか」といって納得している様子に感心した。大人にとって当たり前の「あまり」ということを納得させるには、発達段階に応じた操作活動を行わせることが大事だと、改めて痛感した。

第1回「いじめ問題対策連絡協議会」開催（7/12）

今回は、「氷見市いじめ防止基本方針」の見直し・改善を視野に入れ、学校と関係機関及び団体のよりよい連携の在り方について、「未然防止」「早期発見」「早期対応」「再発防止」の4つの観点から協議しました。委員の方々からは、それぞれの立場から、日々の取組を踏まえ建設的な意見が出されました。



「未然防止」に向けては、「スクールスタンダード」「小中学校、高校、地域と連携した挨拶運動」「外部団体との情報交換」が効果的であること、また、対話を重ねることで、お互いの深い理解につながることで、子供が達成感を味わい、役に立っていると感じられる体験をし、認められることで気持ちが充実し、自尊感情が高まることなどが話し合われました。

「早期発見・早期対応」においては、子供の小さな変化や気になる言動をキャッチし、みんなで共有したり、情報交換したりすること、日頃から「観察」「伝える」を強く意識して子供と接すること、学童やスポーツ少年団の指導者と学校がうまくつながることが大切であることを確認しました。また、保護者同士が互いに思いを伝え合うことで、早期発見を補完できるといった意見が出されました。

「再発防止」に関しては、子供の非行の原点にメスを入れることで、根本的な解決につながることで、学校の会議に外部団体も参加することで日々の連携が強化され、再発防止にも結び付くことなどの意見をいただきました。

教育委員会事務局としては、今回の貴重な意見や提案を参考にし、「顔の見える連携」を一層図っていきたくと考えています。各学校においては、「学校いじめ防止基本方針」の見直しを含め、より実効性のあるいじめ防止対策を推進されるようお願いします。

確かな学力を身に付けた生徒の育成

～とやま型学力向上プログラム（Ⅱ期）を踏まえた実践から～

氷見市立西部中学校

1 研究の視点と実践内容

○視点1 ねらいを明確に意識した授業構想と終末における学習成果の確認と次時への意欲付け

- ・本時の具体的なゴールを明確にして言語活動を行い、終末に本時の学習を振り返る場のある授業を実施した。
- ・ICT機器（電子黒板等）を活用し、生徒のノートを提示したり、デジタル教科書を使ったりして、本時の学習成果が整理しやすくなるよう授業を展開した。

○視点2 自分の考えをもち、深めるための言語活動の工夫

- ・用語や公式等、基礎的・基本的な知識及び技能を定着させる場を設定し、確認・深化させるための授業を工夫した。
- ・ノートを集め評価することにより、考え方が分かるノート作りを行った。また、自分の考えを深めるために、自分の考えを説明する場を設定したり、グループ学習の形態を工夫したりした。
- ・大学の先生を講師に招き、実際に数学の問題を解く活動を通して、考えることの楽しさやおもしろさ、大切さを学ぶ機会を設けた。



〈グループ学習に取り組む生徒〉

○視点3 地域、家庭と連携した生活習慣の改善

- ・家庭での生活時間の見直しをする機会を設けた。
- ・出身小学校区ごとに学習時間やSNS等の利用時間を調査し、生活習慣の改善を促した。
- ・ネットトラブル防止講習会を開き、ネットの正しい利用の仕方を紹介した。
- ・各種たよりを利用し、生徒の実態を保護者にも理解してもらい、家庭と協力しながら生活習慣を改善していくようにした。

○視点4 校内の研修体制と研修機会の充実及び外部研修の内容の共有化

- ・研究授業や互見授業を通して教科の枠を外し、様々な角度から意見交換をして授業改善を行った。
- ・授業研究の事後研修において、フリーカード法を取り入れた。授業の良かった点、改善点を色別の付箋に記入し、授業の流れに沿った時系列で付箋を貼り付け、授業の場面ごとに検討を行うようにした。

2 研究の成果と課題

〈成果〉

2年間の取組の結果、平成26・27年度全国学力・学習状況調査のA、B問題とも平均正答率が全国及び県平均より上回り、中教研学力調査においても平均正答率が県平均を上回った。

生徒アンケートの結果からは、「授業のねらいは明確か」の項目で90%以上が「あてはまる」と答えており、課題をもって授業に臨んでいることが分かる。また、「ノートづくりを工夫する」「重点的に勉強することが大切である」「考え方が大切である」などの項目で評価が高くなり、授業に課題をもって臨み、その課題を解決するために一生懸命に考えようとする生徒が増えてきていることが分かる。

〈課題〉

グループで意見をまとめる場面では、活発に意見を述べる生徒の考えが優先され、数の少ない生徒の意見が埋没してしまうため、学習形態などに工夫が必要である。

家庭での正しい生活習慣や学習習慣の確立が不十分な生徒の存在がある。個別の指導や家庭との連携を一層充実させる必要がある。

「氷見の教師未来塾」第1回講演会（兼第1回教育セミナー）

6月29日開催

講師 一般社団法人共同通信社 名古屋 隆彦 氏
演題 「大津中2いじめ自殺 学校はなぜ目を背けたのか」

「氷見の教師未来塾」第1回講演会（兼第1回教育セミナー）は、共同通信社 名古屋隆彦氏を講師として開催しました。名古屋氏は、大津市の中学2年生いじめ自殺の真相を究明すべく取材を重ねられ、『大津中2いじめ自殺 学校はなぜ目を背けたのか（PHP新書）』を執筆されました。本講演会で語られた思いを、著書を参考に、その一端を紹介します。



【かけがえのない命】

かけがえのない子どもたちの命が失われていく。

その一人ひとは、統計に表れるような、たんなる数字ではない。

外形的ないじめの事実を書くだけでは、伝えることはできないと思った。人生のわずか一時期かもしれないが、彼らの生きた証を記さなければならないと思った。

取材をいくら尽くしても、真相には届かない。取材すればするほど、真実から遠ざかると感じることもあった。ここに書かれたことは、彼らのすべてではない。

それでも私たちは書きつづけることでしか、次の悲劇を止めるすべをもたない。

彼らの心に寄り添ってほしい。いじめとは何なのか。そこから考えてもらえたらと願う。

【自殺の練習】

「自殺の練習をさせられていたらしいんです。」大津支局の若手記者からの電話が、この取材の始まりだった。

「自殺の練習をさせられていた」との情報を全校生徒へのアンケートで得ながら、調査を打ち切った大津市教育委員会。市教委は記名で書いた4人を中心に話を聴いたが、直接見聞きしたわけではないことがわかり「事実とは確認できない」と判断。記載内容を公表せず、調査を打ち切った。問題発覚後、「自殺の練習」との記載内容について、加害者側の生徒に確認していなかったことが判明した。

【想像力をめぐらせてほしい】

私たちの取材は「なぜ学校はいじめに気づくことができなかったのか」という疑問からスタートした。当初、識者からは「今回のケースでは、いじめの発見が容易ではなかっただろう」と学校を擁護する声もあった。ところが、関係者の証言や入手した資料などから、実際には複数の先生が異変に気づいていたことが次第に分かってきた。端緒をつかんでいたのに、うまく情報を共有できず止められなかったとすれば、事態はより深刻だ。最悪の結果を招いてしまった学校の姿が浮かんできた。

教員の多忙化は確実に進んでいる。しかし、行動を表面的に見るのではなく、想像力をめぐらせて、行動の裏に隠された思いを受け止めてほしい。

自分のクラスにいじめがあるかもしれないことを仲間に素直に語れるか、そして、素直に語る場所があるかどうか。教師にとって、学校にとって一番重要なことかもしれない。

【参加者の感想より】

- ・ 被害者、加害者、学校それぞれに寄り添いながら取材をされた講師の人柄に感動した。
- ・ 情報を共有することの重要性を改めて強く感じた。大津中の対応の中で、養護教諭の役割の大きさや働きかけの必要性も再認識することができた。
- ・ 「何があったら学校は動き出していたのか」という言葉が、とても心に残った。「様子をみる」という言葉をよく使いがちだが、小さな変化にもしっかりと目を向けて、子供と関わっていきたいと感じた。
- ・ 「行動の裏に何があるのかを考える」という言葉が強く印象に残った。現在自分は担任をしており、生徒に対して注意・指導することがよくある。行動ばかりに目を向け、困った行動をとらないことで安心するのではなく、生徒が何を想い、何を訴えたいのかを深く深く考えていくようにしたいと思った。

ALT アンドレアさん

ありがとうございました

3年間、英語や外国語活動の指導をしていたALTのAndreaさんが、7月末で勤務を終え、アメリカに帰国することになりました。でも、Andreaさんは、日本の大学院に進学し、日本語を教える教師を目指すそうです。

メッセージをいただきましたので紹介します。



Andreaさんからの言葉



Hello, everyone!

I have been an ALT in Himi for three years now, but it is time for me to return to the U.S. I will spend some time with my family before coming back to Japan to go to graduate school. I want to be a Japanese teacher in the future, and teach many people Japanese!

I have enjoyed the time I spent in Himi very much. I'm going to miss all of my students, especially seeing them at festivals. I'm going to miss cycling to beautiful Nadaura, and having hanami at Asahiyama Koen. Himi has been my home for three years now, and I'll never forget it or the people I have met here. I think Himi has some of the kindest people in all of Japan! Everyone has been so helpful and welcoming. I will truly miss being able to say hello to all of you.

Thank you for making my stay here so wonderful. Let's meet again in the future!

Andrea Spain